

とかけ

室生犀星

青空文庫

わたしの今住んでいるところは、川原につづいた貸家で庭には樹も草もない。眩しい日かげに打たれた砂利ばかりである。だから滅多に庭へは出ない。ただよくとかげが這うている。飴色の肌をしているのと、虹のような色をしているのが、まぶしい日光の中を這い出しながら、低い蚊や蠅の飛ぶのを見ている。——暑い日には少しばかりの雑草のかげから、三角形の口を少し上向きにして、凝然として何かを狙っている。が、別に蚊も蠅も飛んでいるわけではない。かれは唯待ち伏せをしているだけである。ちよつとした物音にも直ぐ頭を曲げて物音のする方へ向ける。……眼も一しよに動く。あぶらのように柔らかいからだだが砂利の間に

たらりと零れると、すぐ這い出して行くのである。そしては又立ち停どまつて眩しい夏の日光の中にうずくまっている。

わたしは始め二三疋くらいだろうと思っていたが、ところどころの石垣の間から出るのを交ぜると十疋くらいは居ると思った。かれらは二疋ずつ追いかけて合ったりして、庭先きの森閑とした昼過ぎに、寂しい忌み嫌いされるその姿を現わした。わたしは五六寸もあるかれらの奇体な原始的な姿を庭の内に見出すことが、何となく可愛らしく思われた。手と足で砂利の上を這うている頓馬とんまで其の癖素早い姿が、木彫か何かの古くさいもののように珍らしかつたからである。

明るい日光というものは、また夏の午後過ぎというものは余り

に明るすぎて、しんとして物寂しいものである。深夜などと違つた物静かさで、かげなども極く短い真昼には、心をしずめていると何か啜り泣きをしているように思われるくらいだ。人間はそんなときに睡たくなるものだ。人間が睡たくなるというのは、よく考えると日光が真上に赫かがやいて樹のかげが縮まっているような姿に似ている。——そんなときに、わたしはまた明るい暑い庭さきに立って何か考えている。そして眼の前にはとかげが三四疋這うていて、あぶらのように美しい肌を白い砂利の間に踏ませている。何の音もない！

「とかげの尾を切っておやりなさい。ぴくぴく動くやつを切っておやりなさい。」

そうわたしの頭脳の中で、ひと声がした。見れば尖端ほど細まり鋭くなつたとかけの尾が、礫をひとまわりして、寂しく空を向いてはねている。——ふむ、こいつを一つ切つてやろう。わたし

の心は瞬時にして悲壮な画面を描くために、やや睡気ざましをそぞろに感じた。わたしは竹切れをさがした。その尖端をナイフで掠め、ナイフと同じいくらいの鋭い刃拵えをした。指頭にさわると西洋剃刀くらいの刃あたりが麗朗として感じられた。——わたしはこれでいいと呟いた。これなればあいつの尾くらい切れるだろうと思つた。早くおやり、誰かがそう言う。振りかえると庭のすみの方に下婢が黙つて張物している。うしろ向きになつて絹裏を板の上で湿らせ、指さきで練っている。日かげで下婢の顔が赤

く恐ろしくなつて見える。……

「何時か？——」

わたしは下婢にそう声をかけた。寂寞がわたしをそう呼ばしたのではなく、ただ、何気なく、言わば心にもないことを尋ねたのである。

「何時でございますか知ら？ 見てまいりませうか。」

「いや。」

ちよつと考えて「二時ころだろうね。」と言つた。

「まだ郵便がこないところから見ますと、二時ちよつと廻つたくらいでございませうね。」

わたしはその時に棒切れをとかけの尾にさわらせようとしなが

ら、ぐいと力をこめ、砂利に棒切れの突っ立つ音をきいたが、

「そんなものだろう。——」

と言った。てれているのだわたしは？ が、とかげは一寸くら

いのちぎれた尾を置いて、からだの拍子をとりにくそうに逃げた。きれた尾がきりきり舞いながらこまかい砂を動かして、うずを巻いて、これは何という明るい眩しい日になったろうと思うた。石垣の穴に尾を奪とられたとかげのかげが消え、紫色にかげった石の穴が冷やりとして見えた。切られた尾はこれも一疋の虫のようにきりきり舞いしているのが、だんだん力が弱くなりばたりと砂の上には舞わずに落ちてしまった。そして思い出したように少しずつ動いた。二分くらい経つたろうか、こんどは少しも動かなくなっ

た。わたしはまた棒切れをその尾に当てた。すると棒切れがさわると始めて吃びっくり驚おどろしたように又蠢うごめいた。ふしぎな生きものだと思つた。それから五分の後にもわたしは棒切れをさわらせたが、もう動くことがなかつた。そこには一杯の蟻あまが行列をつくつて、不意の祝祭のうたげのうたをうたつていた。

わたしは棒切れを捨てて、日かげで或る考えに思いついた。それはわたしの国ではとかげというものの尾が切れやすいのは、敵に遭うたときにその尾だけを残して逃げるように出来ていることや、一たん斬られた尾はきつと又継ついで行つて了うということ、それゆえ尾は小さい節のようなものから組立てられていることなどをわたしは年寄りから聞いていた。だから子供であつたわたし

は人気のないときに、きつととかげが自分で自分の尾をこつそり
継いでゆくことを、何よりも固く信じていた。それがどういふ
うに継ぐのだから知らなかった。

「とかげに指を差すな。さしたら指がくさってしまふ」

子供のときは唯そう聞いた。が、わたしは今までに幾度か紫色
をしているとかげに指を向けて差したが、腐りはしなかった。た
だ、わたしの知ったことは、とかげの尾が一ぺん切られたものが、
もう一度尾をつぎに来るといふことも嘘であったことだった。な
ぜかと言えば最^もうとかげの尾は蟻に引かれながら白い砂地の上に、
すこしずつ動いて行くではないか？——それにも関わらず尾のな
い一疋のとかげが、砂地の白い遠方にかがんでその尾の冷たくな

つたのを眺めている。わたしの疲れた暑い頭がいまその姿を見つけたのである。

「張りものが済んだらお茶を一杯もらいたいものだ。」

「ここへでございますか？」

「ここへ。」

わたしは途方もない詰らないことを言い出すくせがあるので、下婢はふしぎな思いもしないで、茶の間へ茶を淹れに行った。相変わらず暑いうえに、乾いた砂の上に七八疋くらいとかげが歩いている。可憐いじらしい遊びようをしている。が、わたしは何時の間にか、尾のないとかげが非常にからだの調子が取れなくて、歩きにくそうによちよち歩いているのを見た。そしてわたしの考えは気

の毒な気がしたのだった。まるで他人がしたことのように思われるほど、先刻のわたしのしたことを遠い時のように思われた。

「一たい夏の永い日にあつたことと言うものは、永い日自体から忘れやすいものだ。朝のことが昨日のことに思われるから妙だ。」わたしはそう考えて、一杯の茶を庭のものかげで飲んだ。「例えばわたしが先刻あいつの尾を切つたときに、何か知ら悲壯な物哀しさを感じたが、いまはその考えが深増さるばかりではないか？——」そうわたしはまた考えた。

翌日もわたしは可憐らしいとかげの遊びを見た。六七疋ずつ散らばつて何かをあさつてゐる姿が、一昨日よりも深く心に長閑にかんじられた。その中の一疋の尾のない奴がまじ雑つてゐるのが、わざ

とわたしの眼前をしずかに通りすぎた。

「気の毒なことをした。」

わたしはそう言つて、わたしらしい良心を呼びさまし、そのことによつて慰められようとした。かれはかれらしい無邪気さで、青い鬼であるわたしの眼の前を平気で歩いている。――

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆18 夏」作品社

1984（昭和59）年4月25日第1刷発行

1999（平成11）年11月20日第20刷発行

底本の親本：「室生犀星全集 第三巻」新潮社

1966（昭和41）年2月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2014年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

とかげ

室生犀星

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>